
B I G B O S S と彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

M16A1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIGBOSSと彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

【Zコード】

Z2185Z

【作者名】

M16A1

【あらすじ】

1976年、アフリカの某国で戦っていたスネークと彼の部下は気が付くとなぜか学園黙示録の世界にいた。スネークたちはく奴らへと戦いつつ自分達の世界に帰る方法を探る。作者はアニメ版しか見ていません。

プロローグ

1976年アフリカ

アフリカの乾いた大地で男達が戦っていた。

男達を率いていたのはスネーク、MSF（国境なき軍隊）の最高指令官でまたの名をBIG BOSSと呼ばれる男だ。

「ボス、こにはもう持ちそうにありません！敵の攻撃が激しそぎます」

スネークの部下の一人、コードネームホーネットがスネークに言った。

なにしろこちらはスネークを含めて4人なのに対し、敵はこちらの十倍の兵力で攻撃してきており、

さらに装甲車まで従えていた。「ボス、命令を！」

ホーネットが言った。部下の全員が彼の命令を待っていた。

スネークはしばらく考えて言った。「・・・撤退だ

「撤退するんですか？」

ホーネットがそう聞き返してきた。「この兵力で戦況を覆すのは難

しい。」」はいっただん引くべきだ

スネークはそう断言した。「わかりました。お前ら、撤退だ。」

ホーネットはそう言つて、残りの一人の部下・「コードネームはそれぞれジョンソンとトムだ」に撤退

することを伝えた。その時、スネークたちの耳に何かが高速で回転する音が聞こえた。

そしてすぐにその音の発信源があきらかになつた。「武装ヘリ《ガンシップ》だ！」

ホーネットが叫んだ。「逃げろ！」

スネークはそう言い、自身も駆け出した。それと同時にヘリからミサイルが発射された。

ミサイルは直撃こそしなかつた。しかし、ミサイルの爆風に吹き飛ばされ、スネークは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

「」意見「」感想おまかしております。

【OP.1 001】状況を把握せよ

スネークはすばやく身を起した。

スネークはあたりを見渡しながら呟いた。「……は・・・ど・・だ・・」
その時、後ろから唐突に足音が聞こえた。スネークはすばやく後ろを振り向いた。

「大丈夫ですかボス？」後ろには彼の部下が3人とも居た。

「ああ、どこも問題はない。それよりもお前達はどうだ？」

スネークは部下が全員居るのを確認して問うた。

「はい、三人とも無事です。ところでボス、ここはどこなんでしょう？」
うへ、どうみても先ほどまでわれわれが

戦闘していた場所には見えないのですが？」「さあな、俺にもわからん。多分学校のようなところだと思

うが・・・」

スネークはそう言いながら武器や装備を確認していた。幸い武器や装備はすべて無事だった。

その時、スネークに無線がかかってきた。「スネーク、無事だったか！」

無線の相手はMSFの副指令を勤めているカズヒラ・ミラーだった。

「ああ、他の連中も無事だ」

「それはよかつた。すぐに向かえをよこす。今ビリビリいるんだ?」

「それが俺にもわからん」

「わからないって、それはビリビリのことだ?」「そのままの意味だ。俺達はアフリカの砂漠地帯で戦つていた

はずなのになぜか気が付いたら学校のようになると居た。しかも気候もアフリカとは違う。

「 しきて言えば北東アジアのどこかだろ?」

そつと書いたスネークの田にある物が映つた。それはビリビリである案内板だった。それに書かれている

文字を見たスネークはミラーに向ついた。「もしかしてこれは日本かもしれない」

「日本?なぜそうだと思った?」「案内板には日本語が書いてあつた」「それは本当か?俺にも見せてく

れあれを使えば出来るだろ?」あれとは画像転送装置のことである。その装置は外見はカメラに小型の

無線機を取り付けた物で、それで撮影すると、画像が電子データにされて、自動的にマザーベースに送ら

れるという物で、今回の作戦で試験的に導入された物だった。スネ

ークは案内板を撮影した。

しばらくしてミラーから返事が返ってきた。「たしかにこれは日本語だ。いったいこれはどういうことなんだ？」

「なんだ？アフリカで戦っていたはずのあなた達が日本にいるなんて」「さあな、俺達にもわからない」

無線が終わると、スネークは言った。「ここがどこなのか確かめにいくぞ！」

スネークたちは校内を探索していた。すると、スネークたちの前に一人の男が立っていた。

「どうやらこの学校の教師らしい。「おいあんた、少し聞きたいんだが、ここはいったいどかなんだ？」

スネークはその男に話しかけた。するとその男は何を思ったのかいきなりスネークに襲い掛かってきた。

不意をつかれたスネークはその男に地面に押し倒された。「な、何をする・・・」

スネークはその男を引き離そうとした。すると、「ボスから離れろ！」

と言ひ声が聞こえ、すぐに男がスネークから引き離された。

見ると、トムが男を羽交い絞めにしていた。「大丈夫ですか、ボス」すぐにホーネットが駆け寄ってき

た。「ああ」スネークはそういった。すると、「ああ、クソー」といつ声と何かを叩きつける音が聞こえた。

「どうした?」スネークが尋ねると、トムは「ここにきなり俺に噛み付いてきやがったんですよ」

と興奮した口調でいった。見ると、トムに投げ倒されたのか、さつきの男が地面に倒れていた。

スネークはとりあえずふたたび起き上がりとした男を拘束し、ロープで近くの柱に縛り付けた。

それからスネークたちはまた校内を捜索することにした。

しばらく探索しているうちに、スネークは違和感を感じた。（何かがおかしい）

スネークはそう思った。さらに探索していると、学校の校舎のよつな建物が見えてきた。

しかしおかしいのは、その建物から悲鳴が聞こえていたのだ。しかも大量のだ。

そして窓から生徒らしき人影が見えたが、みな何かから逃げ惑っている様子だった。

「銃の安全装置を外しておけ」スネークは部下に声を掛け、自分も所持しているM16A1アサルトライフル

の安全装置を外して、いつでも撃てるようにした。

そして、ついに校舎の扉を開けた。

【001】状況を把握せよ（後書き）

「意見」「感想お待ちしております。

【OPS 002】安全地帯へ退避せよ

スネークたちは扉を開けた。そして校舎に侵入した。あいかわらず悲鳴は聞こえていたが、徐々に少なく

なつていいくようだった。そして廊下には大量の血痕が付着していた。スネークたちは周りを警戒しながら

進んでいった。そして廊下の突き当たりに出た。すると廊下の先の階段で男子生徒と女子生徒が

組み合っていた。すると足音に気づいたのか男子生徒がこちらに顔を向けて「あんたら助けてくれ」

と叫んだ。しかし次の瞬間、その男子生徒は女子生徒に首筋を食いちぎられた。男子生徒は首筋から血を

噴出して倒れた。そして女子生徒は男子生徒の死体に喰らいついた。

それを見たスネークたちは目を疑つた。これまで幾多の戦場を渡り歩いてきたスネークたちもこのようない

光景は見たことがなかつた。スネークたちはなるべく足跡を立てないようにその場を離れよつとしたが

ホーネットが足を滑らせて転倒した。その音で女子生徒はこぢりを向いた。そしてこちらに向かってき

た。その直後、叫び声とともに銃声が聞こえ、女子生徒が吹っ飛ん

だ。ジョンソンが恐怖のあまり所持していたスペース12ショットガンを女子生徒に向か、撃つたのだ。

「やつたか」ジョンソンはそう口走つたが、女子生徒は胸に12ゲージ弾を浴びたにもかかわらず平然と

起き上がつた。「な、なぜだ。ちゃんと当たのに」ジョンソンがそう言う横でスネークはM16A1

で女子生徒の頭部を狙つた。付属しているレーザー・ポインターの赤い光点が女子生徒の頭部に当たつた。

その瞬間、スネークはトリガーを引いた。銃声が響き、女子生徒の頭部を5・56mm弾が貫き、

女子生徒はその場に崩れ落ちた。スネークは女子生徒を倒せたことに安堵した。しかし、銃声を聞きつけ

てさつきの女子生徒のよつた奴が次々と集まつてきた。「頭だ！ 奴らの頭を狙え！」スネークは部下に

そう言つと、自らも奴らに銃撃した。しかしいくら倒しても敵が次々に現れ一向に減らなかつた。

「こまま奴らを相手にしていてはきりがない。とりあえずいつたん退くぞ」

スネークは部下に告げた。そしてスネークたちは敵に銃撃を加えつつ、出口に向かおうとしたが、

敵が多いので、スネークたちは出口に向かうのをあきらめ、校舎内の安全な場所で態勢を整える

ことになった。そしてスネークたちは立てこもるのに最適な部屋を見つけた。

「俺がここが安全か調べるからお前達はここで奴らをくことめておけ」スネークはそう言つと、

部屋に突入した。そして部屋をクリアリングしたが、敵の姿は見当たらなかつた。

「クリア」スネークは部下にさう声を掛けた。すると彼の部下が次々に部屋に入ってきた。

最後に外でRPK軽機関銃で敵に掃射を加えていたホーネットがスネークたちに合流した。

そしてホーネットが部屋に入ってきたと同時に部屋の扉が閉められた。

「いつたいなんなんだいつらは！」スネークは誰に話しかけるでもなく怒鳴つた。

「奴らは映画で見たゾンビそつくりでした。もしかしてここにいる奴らも……」

ホーネットがそう言いかけた。するとジヨンソンが「馬鹿なゾンビなんて非科学的なものがいるはずな

いだろ！」と怒鳴った。その後、建物の外から轟音が響いてきた。

スネークは部下を黙らせると、窓を開けて窓の外を見た。すると、校舎の上空を大量のヘリコプターが通過する

のが見えた。そのへりは民間用のへりではなく、前にミリマーも所属していたという自衛隊と呼ばれる組織のものだつた。（自衛隊が出動するほど事態は逼迫しているのか）

スネークはそう思った。

その直後、トムが急に咳き込み始めた。「おい大丈夫か」

異常に気づいたホーネットがトムに駆け寄つた。すると、トムはいきなり口から血を吐き出した。

「どうしたんだいつたい！どこか怪我でもしたのか！」吐血したことに驚いたスネークはトムに駆け寄つ

た。「だ、大丈夫です」トムはそう言って立ち上がろうとした。

「どう見ても大丈夫には見えないぞ！しばらくせいで休んでろ」スネークはそう言った。

そして何気なく窓の外を見た。窓の外では相変わらず人が人を食らう非現実的な光景が繰り広げられてい

た。すると一人の男子生徒が逃げているのが見えた。するとその内の一人が奴らに捕まり腕に噛み付かれ

た。すぐにもう片方の生徒が引き離し、一人はまた逃げ出しが、しばりくすると噛まれたほうの生徒の

様子が急におかしくなった。その様子はわき狂ひのトムの様子にそつくりだつた。やがてその男子生徒は

ぴたりとも動かなくなつた。もう片方の生徒はその生徒の様子に動搖しているようだつた。

するとわざ今までぴたりとも動かなかつた生徒がゆっくりと起き上がりつた。

それをみてもう片方の生徒が安心したよつてその生徒に話しかけたが、その生徒は話しかけている生徒の

肩を掴むと、首筋にかじりついた。そしてその男子生徒は息絶えた男子生徒のかじりついた。

「ボス、これはいつたい・・・」ホーネットが窓の外を驚愕に満ちた顔で問いかけた。

「どうやら奴らに噛まれたら奴らの仲間入りになるようだ

スネークはそつて言った。その後、「なら俺も奴らの仲間になるのか

とトムが呟いた。どうやらトムもこれを見ていたらしい。

そしてまた血を吐き出した。その後こう言った。

「ボス、俺はもう長くは持ちません。なので俺を撃つてください。俺は奴らみたいになりたくないあります

ん!」トムがそう言った。「何を言つてんだ!お前が奴らみたいになるわけないだろ!」

ジョンソンがトムに向けて怒鳴つた。その後、トムが血反吐を吐いて床に倒れた。

「そろそろ俺も年貢の納め時みたいだ。最後にこれだけは言いたい。・・ホーネット、ジョンソン

お前らと戦えて本当によかつた。そしてボス、俺はあなたの部下になれて本当によかったです

トムは最後にそう言つと、息を引き取つた。

「そ、そんな、嘘だ、少し噛まれただけなのに」「ジョンソンがそう言つているなかスネークはホルスター

からM1911A1のカスタムモデルを抜くと、トムの亡骸の元へ向かつた。

そして銃口をトムの頭部に向けた。

「ボス、何をしてるんですか?」トムの横ですすり泣いていたジョンソンが尋ねた。

「こいつの願いをかなえてやるんだ」スネークはそう言って安全装置を外した。

「ま、待ってくださいよーまだトムが死んだとは決まってないじゃないですか！」

ジョンソンがそう言った直後、トムの指先がぴくりと動いた。そしてトムはゆっくりと起き上がった。

「ほ、ほら、やつぱり俺の言つとおりだ・・・」ジョンソンは当のトムの様子を見て息を飲んだ。

トムの様子はさきほど比べて顔に生氣をまったく感じられなかつた。

「離れてろ」スネークはそう言ってジョンソンを押しのけた。その後、トムがスネークたちに向

襲い掛かってきた。「すまない」スネークはそう呟くとトリガーカーを引いた。

校舎内に一発の銃声が響き渡った。

【002】安全地帯へ退避せよ（後輩や）

「意見」「感想お待ちしております。」

【OPS 003】民間人を救出せよ

あれからどうのくらいたつただろ？　スネークたちには何時間もたつたようにも数分間しかたつていなかつたよ。

ようにも思えた。しかしいつまでもいつしてはこられないことをスネークは自覚していた。

「そろそろいいを出よ。いいむそろそろやばそうだ。」

スネークはドアの隙間から外の様子を確認しながら言った。外にはすでに奴らが大量に集まっていた。

そしてスネークはトムの「骸からPTRS1941スナイパーライフルとPMハンドガン、そしてそれらの

弾薬と他の武器、装備品をすべて回収した。そのころには他の部下も仲間の死から立ち直っていた。

そしてスネークは言った。「いいか、できるだけ戦闘は避けるようにするんだ。あとむやみに銃を撃つ

な。命取りになる。そして最後に・・・絶対に生き残れ！これは命令だ！」

「了解しましたボス！」返事を聞いたスネークは満足そうにうなづいた。そして「行くぞおおおおお！」

と叫んだ。そしてジョンソンが扉の前に立ち、ショットガンで奴ら

のだいたいの頭の位置に照準を

合わせると、ドアごしに弾倉内の弾が尽きるまで連射した。そして扉を開けると、案の定奴らは頭に

12ゲージ弾を食らって即死していた。そして3人は室外へと飛び出した。

そして足音を立てないように廊下を進んでいった。その過程で奴らは視覚や感覚がなく、音に反応する

とも解った。そして学校の出入口付近にまで近づいた。（あとはあそこから外に出るだけだ）

スネークはそう思っていた。その時、当の出入口から悲鳴が聞こえた。

その悲鳴の主は若い女性らしい。「どうしますか？」ホーネットが聞いてきた。

彼女を助けに行くか聞いていたのだろう。その問い合わせに対してスネークは少し考えたあと言った。

「助けにいくぞ！」 そう言つと、出入口に向かつて駆け出した。

そして出入口の近くに奴らが固まっていたのでスネークはM16A1の下部に装着されている

グレネードランチャーで吹き飛ばした。

そして、ついにスネークたちは出入り口に到達した。

するとそこには改造されたネイルガンを持った少年とピンク色の髪の少女、それと大量の奴らが居た。

そしてその内の一体は少女に今にも襲い掛からんとしていた。

「銃は使うな！流れ弾が当たるかもしれん。CQCを使え！」
クロス・クォーターズ・コンバット

スネークはそう言つと、少女に迫つて居る奴らに向かって駆け出した。

そしてそいつを拘束すると、首の骨をへし折つた。『きりと硬い何かが折れる音がしてそいつは崩れ落ち

た。そしてスネークの存在に気づいたほかの奴らがスネークに襲い掛かってきた。

しかしそれに動じることもなくスネークは奴らを迎撃した。

まず一番前に居る奴を掴んで引き倒し顔面に蹴りを入れた。そして次々に襲い掛かってきた奴らを

殴り倒した。そして他の奴らもホーネットとジョンソンが倒して出入り口にいた奴らは全滅した。

出入り口の安全を確保するとスネークは少女に駆け寄つた。「大丈夫か？ 怪我はないか？」

とスネークは少女に問いかけた。「え、ええ。ところであなた誰？」

と少女は問いかけた。

その問いにスネークは答えた。

「俺か、俺はスネークだ」

【OPS 003】民間人を救出せよ（後書き）

「」意見「」感想お待ちしております。

少女が無事なことを確認するとスネークは今度はネイルガンを持つ少年のほうに行つて同様の質問をした。

た。少年のほうも特に怪我などはないよつだ。すると、少年が「そ、それはM16A1ですよね?」と

言つてスネークの銃を指差したのでスネークは「ああそうだ。よく知つてゐるな」と返事をした。

すると少年は「いつにいつに」とこまかに詳しいので・・・といひでそれ少しでいひので触らせて貰えません

か?」

と言つてM16A1を指差してのでスネークは「あいつへこれはおもちやじゃないんだ。

そう簡単に触れさせるわけにはいかない。」とだけ答えた。少年はそれを聞いて不服そうに口を開いた。

開けた口としだが「おい、大丈夫か!」といつ声で遮られた。

そして通路から先ほどの声の主と思われる金属バットを持った少年と細長い棒を持つた少女が出てきた。

そして彼らが出てきたのとは違つ通路から木刀をつた少女と救急キットのようなものを持った女性が

出てきた。そして彼女らの後に一人の男が出てきた。そして彼を見たスネークは驚いた。

「お前・・・スペツナズか？」ホーネットがその男に問いかけた。たしかに彼はスペツナズと

呼ばれるソ連の特殊部隊の兵装をしていた。

ただ他のスペツナズは無地の目だし帽をかぶっているはずだが彼の目だし帽には

」と言う文字が刺繡されていた。

「あ、あんた・・・なんでここに」相手もスネークを

見つけたことに驚いているようだつた。「ボス、こいつと知り合いなんですか？」ジョンソンが

問い合わせた。「ああ、ちょっとな」とスネークは答え男の方に向き直り言つた。

「お前こそ何でここにいるんだ?」ジョニーそしてジョニーと呼ばれた男は「話すと長くなるが・・・」

と言つてここにくるまでの出来事を話し出した。

【004 彼と会流せよ】（後書き）

「」意見「」感想おまかしております。

番外編 ジョニーを学園黙示録の世界にぶち込んでみた1

スネークたちが目覚めたころ、学園敷地内の別の場所で一人の男が目覚めた。

「……」は？」「だ？」その男の名はジョニーだ。彼はつこせつとまでソ連領内で警備任務に

ついていた。そして、その彼を謎の光が襲い、気が付くといつて言つた。

（とりあえず本部に連絡をとる）ジョニーはそう思い、無線機を起動させた。

しかしここは本部に呼びかけても聞こえてくるのは雑音だった。

本部と通信するのをあきらめたジョニーは今度は武器や装備が無事かどうか確認した。

幸い全ての武器や装備は無事だった。

そして確認が終わつたので彼は周囲を探索することにした。

（しかしここはソ連じゃなさそつだ。もっと南の地方らしい）ジョニーはそんなことを思いながら

校内を探索した。その時、悲鳴が聞こえた。悲鳴を聞いたジョニーはとりあえず現場に向かうことにして

た。そして現場に到着したジョニーが見たのは学生と思われる少女がまるでなにから逃げるように

走っている姿だった。しかし、その生徒にいきなり男子生徒が襲い掛けた。

そして男子生徒は女子生徒の首筋に食らいついた。首筋から鮮血を吹き上げて女子生徒は動かなくなつ

た。そしてその男子生徒は女子生徒の死体から肉を引きちぎり、口に運んだ。

それを見たジョニーは今まで味わったことがない恐怖を感じた。

そして無意識のうちにその場から逃げ出そうとした。

しかし、勢い余つて足を滑らせて転倒してしまつた。そして、その音を聞いてさきほど女子生徒の

よつな奴らが次々と集まつてきた。

それを見たジョニーは急いで起き上がり所持しているAK-47を奴らに向け「動くな！」これ以上

近づくと撃つぞ！」と警告した。しかし奴らはそんなことは意にも介さず平然とジョニーに近づいてき

た。そしてジョニーは今度は銃を奴らの足に向け撃つた。そして奴らの足を7・62mm弾が貫いた。

常人なら痛みによって歩けなくなるはずだ。しかし奴らはそれでも動きを止めるることはなかつた。

（殺るしかないのか・・・）ジョニーはそう思つと、照準を奴らの胸に向けた。

これで後はトリガーを引くだけで奴らの命を奪つてしまができるはずだ。

しかし、ジョニーは撃たなかつた。いや、撃てなかつたのだ。

いくら化け物のようでもまだ成人すらしてない子供であることにほれ変わりない。

そしてそれが彼に撃てなくしている要因だつた。そういう感じでいるうちに奴らのうちの一体が

ジョニーに襲い掛かつた。ジョニーはやはりトリガーを引けなかつたので、奴に組み伏せられてしまつ

た。「く、くそ・・・」ジョニーはそう呟いた。AKは組み伏せられたときに弾き飛ばされてしまつた。

サイドアームを使おうにも両手は奴を掴むので塞がつてしまつている。

そしてこの間にも他の奴らがジョニーの元に近づいていた。

（もはやこれまでか。せめて一度でもいいから家族にまた会いたかった）ジョニーがそう思った次の

瞬間、今までジョニーを組み伏せていた奴が頭に何かを振り下ろされて沈黙した。

そしてジョニーに迫っていた奴らも次々に倒された。

そしてジョニーに迫っていた奴らは全滅した。そしてジョニーの目には木刀を持った一人の少女が立っているのが見えた。

「J意見」J感想おまかしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185z/>

BIGBOSSと彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

2012年1月5日18時45分発行